

ホワイトヘッド形而上学の形成過程 ——1919年から1925年2月までの発展史研究——

西脇祐

要旨

本研究は、従来のホワイトヘッド研究において、A. N. ホワイトヘッド（英・米 1861-1947）の主著『過程と実在 *Process and Reality*』（1929、以下PR）を軸に彼の様々なテキストを読解する傾向があったことを踏まえ、PRからの遡及的照射を排したホワイトヘッド哲学の読解方法を採用する。そうすることで、ホワイトヘッド形而上学の形成過程を明らかにする。そのために、ホワイトヘッド自身が明示した形而上学研究の構想を明らかにし、それに即して、ホワイトヘッド形而上学の発展史を跡づける。したがって本発展史研究は、PRに関わる事柄がいつ生じたのかを問うのではなく、ホワイトヘッドが形而上学的研究の構想をいかに展開したのかを問うものである。

そのために本研究は、1919年から1925年2月にかけての、ホワイトヘッド哲学の発展史を特徴づける。特に、1924年8月にホワイトヘッドが『自然認識の諸原理』の第二版への序文（以下、「第二版の序文」）で述べた形而上学研究の構想を明確にし、その構想がどのように展開しているのかを辿る。「第二版の序文」において彼は次のように述べている。

本書の第一版が1919年に出版されてから、本書がもつ様々な主張は『自然という概念』と『相対性原理』においてもまた検討されてきた。私は近い将来、この三部作の見地を、より完全な形而上学研究のもとに包含したいと思う。（PNK ix）

この記述が示すように、ホワイトヘッドは自然哲学期の三部作を破棄して新しい形而上学研究を始めたのではなく、それらを包含する「より」完全な形而上学研究を構想していた。したがって、1924年9月以降の形而上学研究は、三部作の見地をより広い理論的枠組みに位置づける試みの側面をもつ。そのため本研究では、「第二版の序文」に示された構想の展開を論じるために、1919年以降の自然哲学期と、1924年以降の形而上学期との連続を検討し、形而上学期の構想と展開を明らかにする¹。

本研究は三つの区分に分けられる。第1章から第3章までは、1919年から1924年8月にかけての自然哲学期を扱う。そこでは、1924年9月以降に形而上学へ包含されていく諸論点を確認している。第4章と第5章では1924年9月から1924年12月4日までの講義を中心に、自然哲学から形而上学への展開を論じている。ここでは、自然哲学期の議論と形而上学との連続性、および形而上学研究の展開を明らかにしている。第6章では、1924年12月11日からローウェル講義（1925年2月）までの時期を中心に扱っている。この時期にホワイトヘッドは、同時代の生物学における進化論や有機体論をみずからの哲学に取り入れることで、宇宙進化を視野に入れた形而上学を形成している。以下、各章の内容を概観する。

¹ ホワイトヘッドが「第二版の序文」で言及する三部作（『自然認識の諸原理』、『自然という概念』、『相対性原理』）では、自然科学が扱う自然という概念を統一的に提示することが一つの主題となっている。そのため、本研究で扱う1919年から1924年8月までの時期を便宜的に自然哲学期と呼ぶ。また、「第二版の序文」の記述に従い、1924年9月からの時期を形而上学期と呼ぶ。

第1章では、本研究で扱う期間において重要な用語である「出来事 (event)」について検討している。まず出来事が、科学、とりわけ物理学の時間空間関係を記述するものとして考案された概念であること、また出来事が部分全体関係を示す「延長 (extension)」という特性をもつことを確認している (1.1)。次に、出来事と、そこから導かれる時間空間関係を示す要素 (「点」といった幾何学的概念) がいかなる関係にあるのかを明確にするため、延長抽象化の方法を検討している (1.2)。これによって、ホワイトヘッドが、出来事などの哲学的概念の正当性を、科学において用いられている議論との関わりにおいて主張していたことを明らかにしている。彼の哲学は、抽象的な領域を否定し、自身の具体的な用語の内部において議論を完結させるものではなく、経験において見出される出来事と、抽象的な諸科学との関係を問うものとして理解される。彼は延長によって、具体的な経験と抽象的な科学との接続を試みたのである。そして、延長の役割は、形而上学期においてプロセスに取って代わられる。この展開に関しては第4章と第6章で論じている。

第2章では、ホワイトヘッドが自身の哲学において、W.ジェイムズの「見かけの現在 (specious present)」をいかに用いているのかを検討している。ホワイトヘッドは出来事を見出すことのできる知覚論として見かけの現在に注目した。そして、見かけの現在が身体と切り離されて考察されえないことを起点に、ホワイトヘッドは自然から独立した精神によって自然を描写しない實在論を展開している。この点に関して本章では相対性理論に対する観念論と實在論の解釈の違いを検討している。そこにおいて観念論者が観察者を精神 (mind) とするのに対して、ホワイトヘッドは、實在論者は観察者という言葉を用いるとき、その身体も含めなければならないと主張している。この立場において彼は、孤立した精神をもとに自然を描写するのではなく、自然内部にある身体を中心とした知覚論を形成する。身体的出来事は自然内部において影響を受けるとともに、他の出来事に影響を与える。このような自然内部での相互関係のなかで知覚を考察する實在論的な知覚論を、彼は自然哲学期に形成していた。

第3章では、第2章で確認した身体を含む知覚論を踏まえ、ホワイトヘッドが自然と知覚との関係をいかに捉えているのかを明らかにしている。彼の知覚論は、孤立した精神を想定せず、様々な関係項との関連のもとで自然の性格を記述するための関係構造を提示している。その際に明らかになるのは、ホワイトヘッドが知覚の内容に対して「なぜ」それが生じたのかを説明するのではなく、知られるものが何であるのかを記述する哲学を形成していることである。これにより、彼は自然の二元分裂を前提としない哲学を形成している。二元分裂をもたらす哲学として彼があげるのは、知るものと知られるものを総合する形而上学である。ホワイトヘッドの形而上学とは、このような形而上学を意味するのではなく、自然哲学期の哲学の方向性を拡張する形而上学的科学である。この点に関する展開は、第4章と第5章において、形而上学期における考察のもとで明らかにしている。

第4章では、ホワイトヘッドの「第一講義：1924年9月 “First Lecture: September, 1924”」 (以下、FL) を手がかりに、自然哲学から「より完全な形而上学研究」 (PNK ix) への移行を考察している。本研究で検討するのは自然哲学と形而上学との断絶ではなく、自然哲学の見地を包含しつつ、それを超えていく「より完全な」形而上学への移行である。ここで重視するのが自然哲学期における「意味づけ (significance)」である。意味づけは、知覚において見出された自然の要素がいかに知覚外部の自然と関連しているのかを性格づける理論である。本章では、意味づけの問題意識——断片的に見える個々の知られるもの (存在) がいかにして自然あるいは實在全体と関係しうること——が形而上学期においても継承されていることを指摘している。ホワイトヘ

ッドは「科学的調査に向かう究極的な動機を正当化する」(FL 45)ためには、この問いに答えなければならないと考えており、両時期ともに当の問いをめぐる哲学が編まれている。FLにおける展開に関しては、考察の範囲が「自然」から「実在」に拡張し、記述の中心が「延長」から「プロセス (process)」へ移行することを明らかにしている。1924 年 9 月においてホワイトヘッドは、経験におけるあらゆるもの(実在の領域)を統一するという「遥かな理想」(CN 2)へ向けた、確かな一歩を踏み出したのである。この試みは後に経験によって示される潜在性への言及に至る(第5章)。

プロセスに関しては、ホワイトヘッド自身が自然哲学期以後にプロセスを中心として哲学を形成すると述べていることを指摘している。また、自然哲学期においてそれは主として推移の意味で用いられていたが、形而上学期において彼は、生成のプロセスという実現過程の意味をプロセスに含めている。このことから本章は、プロセスという概念を軸にしたホワイトヘッドの哲学が、流動によって常に新しい具体性が生じることを単に意味するだけでなく、個別的な存在ないし存続存在がいかなる過程を通じて生成するのかを問う哲学であることを明らかにしている。1924 年 9 月においてこの問いは、制御理論として提示された。この理論によって彼は、自然哲学期の延長理論を超えて、いかにして質などの対象が宇宙の流れの中で提示されるのかという構造を提示しようと試みていた。偶然性を含みながらも、ある存続存在は、その存在の過去や周囲からの限定を受けて存続しているのであり、その存在が現在そこにそのような性格をもって存続していることの整合的な記述が可能ならずである。彼は 1924 年 9 月から、以上のような生成プロセスを論じるために、プロセスの理論を構築し始めた。このプロセス論に新たな視点を加えたのが、1924 年 12 月以降に議論的になった生物学的考察であり、この点に関しては第6章で論じている。

第5章では 1924 年 9 月から 1924 年 12 月 4 日までの講義録を検討し、形而上学の形成過程を実在論の観点から考察している。本章では、ホワイトヘッドの実在論が、経験外部の実在を証明しようとする試みではなく、経験の要素が実在の秩序を指し示うとすればいかなる関係によって可能なのかと問い、そこから要請される関係構造を宇宙論の規模で明示しようとする試みであることを明らかにしている。まず、ホワイトヘッドが実在論を論じる際の時代背景をみている(5.1)。ローは、ホワイトヘッドの実在論が「主観的な経験がいかに客観的な世界から生じるかを記述する」(Lowe 1962/2019: 40)ことを議論している点をホワイトヘッド実在論の特徴としている。しかし、その点は英国アイディアリズム——19 世紀後半に英国で隆盛した哲学——にも見られるため、実在論のみに当てはまる特徴ではないことを指摘している。次に、ホワイトヘッドが、私たちの経験から離れて実在そのものを検討することで経験がいかに構成されるのかを論じているのではなく、経験から辿ることで見出される実在の秩序の探究として実在論を論じていることを検討している(5.2、5.3)。その際ホワイトヘッドは、自然あるいは実在の秩序を否定せずにその秩序が見出される条件を問うという議論の方向性においてカントを評価しつつも、その条件をアプリアリなものとして扱うのではなく、経験に由来するものとして捉えているという点でカントと袂を分かち。最後に、上述した意味での条件、すなわち実在の秩序の提示を、ホワイトヘッドが「自己説明的根拠 (self-explanatory ground)」という関係構造として記述していることを検討している(5.4)。ここで問題となるのは、経験から演繹的に実在の秩序が導かれることではない。むしろ、経験において実在の秩序を見出すことができるという「素朴実在論 (Naïve Realism)」(HL1 80)のもとで、その事態を説明する一つの形而上学的図式を提示することである。本章では自己説明的根拠が有限性と「潜在性 (potentiality)」で成り立つこ

とを検討している。有限性に関して言えば、「存在 (entity)」が何ものにも依存しない孤立性によってではなく、有限な個別性として存在していることを検討している。有限な個別性とは、ある存在が他の存在によって限定されることでその限定をみずからの存在に含み込み、それと同時にみずからもまた他の存在を限定し、他の存在の構成に含み込まれるということを意味している。これにより、ある存在が当の存在であるための根拠が当の存在のうちに含まれることになる。そして、その根拠が、他の生起においても、当の生起との関連として現れうることを検討し、それが、実現する生起に即して「過ぎ去らないもの (that which does not pass)」 (HL1 72, 93) として見出される潜在性であることをみている。潜在性は「プラトンのアイデア (platonic ideas)」とも呼ばれており、ホワイトヘッドがこの時期に、自然哲学期の考察範囲を超えた実在の領域へと自身の哲学を拡張していたことを本研究では指摘している。

第6章では、1924年12月11日からローウェル講義 (1925年2月) までの時期に検討されていた進化論に関わる議論を通じて、ホワイトヘッド形而上学がいかなる性格を帯びるようになったのかをみていく。本章において、第4章で示した形而上学期の「生成のプロセス」の観点から、当時の生物学の諸概念によってより詳細に論じられていることを明らかにしている。まず、ホワイトヘッドが自身の哲学を「進化の哲学」と呼び、流動を基調とした彼の哲学で問題になるのは、存続の安定性であると考えていたことを確認している (6.1)。すなわち、常に推移して過ぎ去りゆく流動的な宇宙を想定した場合、そのただなかで提示されている人間やカエル、分子といった存続する形態 (秩序) がいかに安定して成り立っているのかを説明することが、その想定を受け入れた哲学の主題となる。ホワイトヘッドは進化のただなかにある「存続パターン (enduring pattern)」を論じることでその問いに答える。この点を検討するため、ホワイトヘッドの議論を補うことを目的として、C. L. モーガンの創発的進化、J. L. ヘンダーソンの環境の適合を参照している (6.2, 6.3)。モーガンはホワイトヘッドが進化を論じる際に想定している階層構造を説明し、ヘンダーソンは環境と有機体との関わりから存続の安定性を考察する視点を彼に与えている。最後に、モーガンとヘンダーソンの議論と、ホワイトヘッドの理論の関わりを明確にしたうえで、存続パターンが有機体の関係構造においていかに考察されているのかを、ホワイトヘッドの議論をもとに明らかにしている (6.4)。存続パターンは、階層関係のもとで低次の有機体が高次のあり方を目指すための潜在性であり、その志向は「部分が全体のためにあるという有機体の概念」 (SMW 185) のもとで安定構造を形成することで実現される。このように存続パターンを描くことで、流動する宇宙のなかで存続存在がいかに実現するのかということを彼は提示している。特に、ホワイトヘッド形而上学における生成プロセスは、単に偶然的に具体的な存在が生成消滅していく過程ではなく、環境において安定性を獲得するために有機体が高次のあり方へと生成していく過程であることを明らかにしている。本章を通じて、存続とは、物質や物体のような流動においても変化しない基底的な存在がもつ性格ではなく、同様の存続パターンが繰り返し実現することで提示される事柄となる。

以上の全6章によって、本研究は1919年から1925年2月までのホワイトヘッド形而上学の形成過程を辿るとともに、その特徴を明らかにしている。本研究は、ホワイトヘッド形而上学がPRの用語の出現によって形成されたのではなく、自然哲学期の諸理論を「より完全な形而上学的研究」のもとに包含し、実在・プロセス・有機体・進化をめぐる理論へと展開していく過程のなかで形成されたことを示している。

参考文献

- Lowe, Victor. [1962/2019] *Understanding Whitehead*. Baltimore: Johns Hopkins University Press. (『ホワイトヘッドへの招待』大出晃・田中見太郎訳、松籟社、1982 年)
- Whitehead, Alfred North ホワイトヘッドからの引用には以下の略号を用いた。翻訳は適宜参照した。
- PNK: [1919/1925] *An Enquiry Concerning the Principles of Nature Knowledge*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press. (『自然認識の諸原理』藤川吉美訳、松籟社、1983 年)
- CN: [1920] *The Concept of Nature*. Cambridge: Cambridge University Press. (『自然という概念』藤川吉美訳、松籟社、1981 年)
- PR: [1929/1978] *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, Corrected Edition. New York: The Free Press. (『過程と実在』上・下、山本誠作訳、松籟社)
- HL1: [2017] *The Harvard Lecture of Alfred North Whitehead, 1924-1925: Philosophical Presupposition of Science*. Bogaard & Bell, eds. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- FL: [2020] “First Lecture: September, 1924,” *Whitehead at Harvard, 1924-1925*, Henning & Petek, eds. Edinburgh: Edinburgh University Press, 41-55.